# 坑口統合を許せば 必ずまた殺されるゾ

## 第四次合理化 認められぬ会社回答

かねて宮浦鉱（明治初期に創業）の閉鎖・三川鉱への統合を中心とする、三井鉱山の第四次合理化阻止の闘いに立ちあがっていった三池労組は、会社が去月三十日に提案してきた〝最後回答〟を受けいれることができず、闘いを続行している。

## いよいよ阻止行動へ

こんどの闘いは、この闘いを自からの闘いとして支援する炭労九州地方本部・福岡、熊本両県評・大牟田、荒尾両地評と結んで〝三池反合理化闘争現地対策委員会〟をつくり、その手によってすすめられているが、すでに三川現地における座り込みをもって、具体的行動にはいっている。

### 新労は待ってましたと妥結

「これが最後回答だ」という会社回答は、なるほどいくらかの部分において、三井が大きく譲歩したことを示している。いろいろの口実をつけた「時金の支給、通勤用バスの運行計画の拡大、わけてもはじめは頑強に閉鎖を押しつけようとした、五千メートルにわたり宮浦坑口につづく百八十メートル坑道を、非常の場合の退避路として確保する――などで、三池新労幹部らはこの回答に接すると、「待ってました」とばかり、「百パーセントに近い画期的な成果だ」として、さっさと妥結してしまった。

### 回答にならず

しかし、三池労組の「全山の人員・生産・保安などの長期計画を示せ」「大幅に拡大する利潤の還元」「減収賃金の補償」「三池一本の常駐救護隊をつくれ」「三池一本の保安管理センターをつくれ」「組夫の直轄化」などの基本的要求についてはまったく答えず、過去に重大災害をあれほど生み出した生産・保安体制をそのまま堅持しながら、あくまでゴリ押しに宮浦鉱の三川鉱統合方針にともなう全合理化計画を、早くも実施に移している。すでに三川鉱柵内においては、座り込み中の労働者の監視の目の前で、傍若無人に必要施設の建設準備を着々とすすめている。

### 日ましにつのる職場の不安

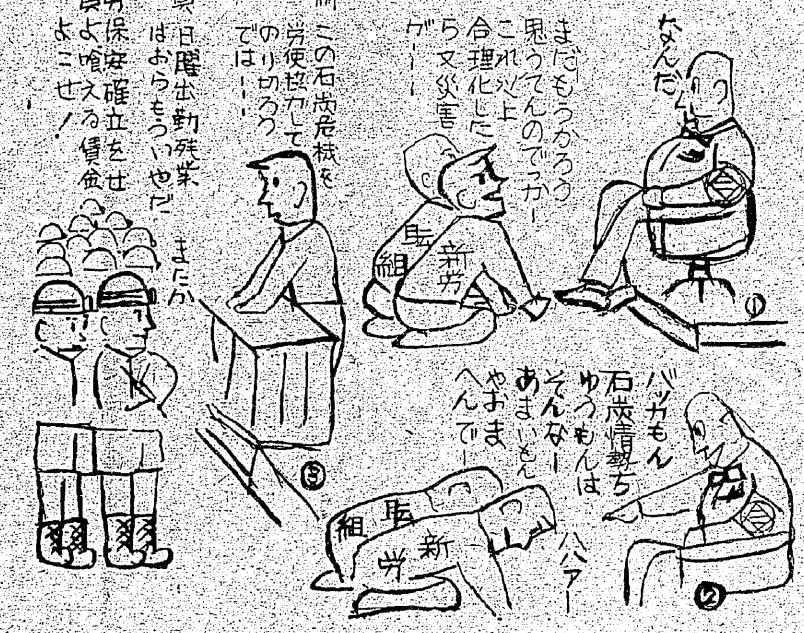
第四次合理化の強行は、すでに早々と妥結して、いまや三池労組の闘いの足をひっぱることだけに血まなこになっている新労の下部組織の間に、大きな不安を呼び起こしている。三川鉱の坑内現場の労働者は語る。

――恐しい第四次合理化、宮浦坑口の三川への移行のための材料運搬が私たちの仕事です。あげくの果てには、こんどは私たち坑外労働者の切り棄て攻撃がくるでしょう。これではいのちも暮らしもなくなってしまうですばい。

――四山鉱で、小石さんが殺されたとき、（本紙一面記事参照）次はオレの番だぞと思い、ゾッとしました。その日坑内からホッとしてあがると、もう明日からは坑内にさがる気にならんですよ。まったくいまの坑内作業は「あぶなか、きつか、苦しか」に尽きます。それに宮浦からはいってくると、とぼんなりますか。

こんど三川上層本線に高圧スイッチ座がすえられました。上層二十六との合併でもあって、そこは材料運搬がはげしくなるところだし、人道でもあります。この本線で函がドマ（脱線）して、スイッチ座に激突でもしたら、真向かいにはガスがあり、上方には上層・本層ポケット（貯炭槽）がならんでいるのに、まさに一触即発です。みんなそこを通るときは、ヒヤヒヤですよ。宮浦鉱統合を許すならば、労働者は必ずまた殺されずにはすまんです。死んだつもりで阻止すべきですよ。

他は割愛するが、第四次合理化攻撃は断固として粉砕しなければならない。




四山指導部所属第5分会職場新聞〝あしおと〟から紹介した。一目瞭然、マンガを闘いの武器としてかこう。

## 詩 その日のために

沖縄　福島玄良

民族の怒りにもゆる沖縄
基地街（キチガイ）といわれる
コザの町
かせぐ大人にもだえる子ども
欠席する我が教え子たち

家庭訪問しても家にはいない
家にいるのはまねかれざる「お客さん」
いいえ私はそれにあいに行った
んじゃない

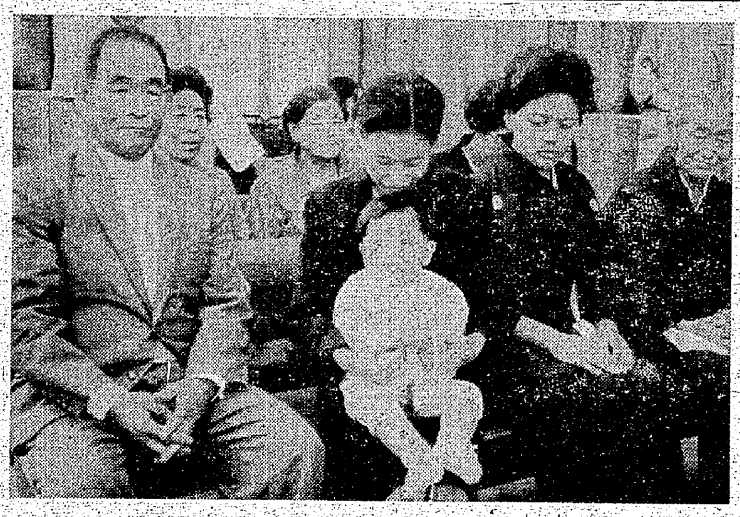
我が教え子はどこへ行ってしまったんだろう？
さがしてもいない教え子
さがさなくても
いつでも
どこでも目につく「アメリカさん」
いるべき場所をうばわれた子ども
たち
ふるさとを求め祖国を求めても
だえる子どもたち
祖国をかえせ！
ふるさとをかえせ！
教え子をかえせ！
沖縄の祖国復帰と日本の夜明け
のためにがんばろう
必ずその日がくることを信じて

×

右の詩はCO患者家族の会の松尾さんに贈られたものです。

## 怒りも新たに 9・28を追悼

三川鉱坑口火災（七人を殺し、再び多数の仲間をCO中毒患者にした）から一年目の去月二十八日三川鉱正門前で〝九・二八一周忌追悼抗議集会〟を開催した。



9・28追悼集会のとき、上村さんの遺児の幸恵ちゃん（満1才）は元気だった。

集会には組合員と家族が大挙かけつけ、あの災害の中で犠牲にされた故上村孝知さんの冥福を改めて祈ったが、満一才を迎えて元気に育っている遺児の幸恵ちゃんの、愛くるしい姿を見ては、改めて人殺し三井に対する怒りがたぎらずにはいなかった。

## 随筆「強情者」

三川　小柳重義

「ごうじょう」というと、たいていの人がすぐ人のいうことをなかなか聞かぬことだと思う。まったくその通りである。私は以前からこのことを考えていた。

ところが、人のいうことを聞かぬというのには、それぞれの人の性格にもよる。反対に「スナオ」であっても、聞かぬ場合もある。

たとえば人のいうことを聞いたのでは、どうしても正しいことがやり通せないということもある。やり通せなければならないという場合には、自分の信ずるところをなんとしてでも貫ぬかねばならないからである。

そんな所から、よく迷うことがあるのではないだろうか。本当は実は人のいうことを聞かぬという「強情」の定義は、ほとんどの強情者がきかねばならぬところで人のいうことを聞かぬので、自然に一般の通念となってきたものであって、本当はきくきかぬということよりも当人の心自体がかたくなである。自分の思いにとらわれすぎているという状態なのではあるまいか。

そうした自分の心自体の問題なのであって、なかなか自分の「強情」さというものはわかりにくい。そのためにこれを改めようとすれば、とに角なんでも人のいうことを「ハイ」と聞く練習をするというべきである。よほど〝ハッキリ〟いけないと分っていることオレは退転したら、いっぺんあんたにあいさつしてやろうと思うとった。これからのこつもあるけんいうとく。人間のいのちと硬石のひっくり返っとと、どっちが大切かつかん」

みんなは突然のできごとにビックリ。ナショナルはしばらくしてから「オレは、そげんかこつは知らん」と突っぱねたから、Bさんはもう一度どなった。

「あんたが知らんちいうたっちゃ、みんなが知っとる」

そしてみんなに「のオ」というと、みんなもしっかりうなずいて「そげん、そげん」といったのでナショナルは黙ってしまった。

私はこの話を、三川鉱の運搬のBさんから聞いた。三井の、転制を通してくる圧制に対する新労組員のうっぷんが、どうか抵抗闘争としてもり上がってくれることを願わずにはいられなかった。

（本所第二転場分会新聞〝二分会〟十三号から）

## 硬石（ボタ）と人間のいのち

ナショナル係員（彼の姓が松下電気の松下と同じなので、横着者の係員に、かげでみんながこの呼び方をたてまつっている）が、甲方運搬より乙方運搬にやってきた。通常この転場の新労組員は、係員の移動、退転の折りは歓送迎会をやるならわし。

新労組員のBさんは、ナショナル係員の歓迎会に、しぶしぶ出席した。それというのも、そのナショナルが以前乙方係員だったとき硬石を積んだ車が、何かの事故で斜坑を逸走したので、Bさんが手動ブレーキで止めようとしたがそれでも止まらなかった。

おどろいたほかの者が、坑木をつっこんでようやく止めることができたが、その折ナショナルが顔色を変えてかけてきていったのだった――「大事故にでもなったらどうするか。身を犠牲にしてでも止めろ」。こんなことがあったからである。

頭にきていたBさん、酒がはいってきたときそのナショナルに大声でどなった。「あんたは、二年前にオレになんちいうたかん。ブレーキのきかんときゃ、身を犠牲にしてでも止めろというたろが。（たとえば〝ドロボウ〟をしろといわれたようなこと）ならいざ知らず、普通のことならまず聞いてその通りやって見ることである。そうするといままで自分では〝ダメ〟だと思っていたことが、予想を裏切ってスラスラはこぶし、こうした経験を重ねると、いままでの自分が大変な「強情者」だったと、本当に分るだろうと思う。そのときそれだけスナオな自分の心が、いかなる場合にも顔をだすようになっているのだ。

人はスナオになれば、実に楽しく自由なのである。いや自由で楽しい心が、スナオなのだといえると思う。

×　×